

今日の説教題は「教会と共に生きる意味」です。クリスチャンはどんなに有能であったとしても一人で孤独に生きてゆく人生を過ごしません。神様はこの世界が創造された時から、私たちが他の人との関わりを持ちながら、共に神様の御心の中を生きるように計画しておられました。教会の人々と一緒に生きてゆくのが神様の変わることはないご計画です。今日のみことばにありますように私たちは結び合わされて成長してゆくのです。教会とはキリストのからだであり、キリストのからだとは私達キリスト者一人一人がそのからだの器官です。そしてキリストのからだの中にキリストのいのちがあるのです。キリスト者として成長しようとするなら他のキリスト者、つまり教会とつながっている必要があるのです。ちょっと硬い言い方となりましたが要はクリスチャン人生、みんなで一緒が良いということです。

では改めてみんなで一緒ならどんな点が良いのでしょうか？ 5つのポイントを挙げておきたいと思います。

まず第一に一緒なら交わりを持つことが出来るということです。聖書は私たちは交わりのために造られたと教えています。一人で交わりを持つことは不可能です。話をしても誰も聞いていなかったら単なる独り言です。ただ、では多く人がいれば、あるいは教会員となったら交わりが持てるかと言えばそうではありません。何もしないで交わりが自動的に出来ていくものではありませんし、与えられるものでもありません。時々、自分には友達がいない。みんな世間は冷たいという人がいますがひょっとしたらそうではなく自分は友達を作れない、そのために行動しようとしないう者であることを認めることが一番最初に行かなければならないかもしれません。聖書で交わりはご存知のようにコイノニアと言います。この中心のことばはオイコスであり、それは家、家庭を意味しています。家、家庭はそれぞれが家庭のために犠牲を払うことによって成り立っています。めいめい自分の好きなように生きていたら家庭が成り立ちません。コイノニア（交わり）もイエス・キリストに自分自身を捧げるように、互いに捧げ合うことを意味しています。「どうか、みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」コリント第一 1章 10節 ある訳では「あなたがたは互いに思いやり深くあることを学ばなければなりません。そのようにして、人生を共同で建て上げてゆくのです」とあります。コイノニア、これは仲良くする、親睦を深める以上のことばです。互いに仕え合い、時には苦しみも共にするという深いレベルの関係を意味しているのです。

次に一緒ならどんな良いことがあるのでしょうか？ 二番目にそれは一緒だから成長できるのです。手であっても、足であっても、成長するためにはからだにつながっている必要があります。キリスト者もキリストのからだなる教会と離れていては成長できません。今日のみことばにあるように「しっかりと組み合わされ、結び合わされ、」て成長するのです。また体全体が健康的に動くためには各器官が調子よく動いている必要があります。赤ちゃんの成長に家族や周りの存在が不可欠であるように、神の願っておられる信仰者として成長するためにはその成長を支える家族、それも霊的家族、つまり教会が欠かせません。教会という共同体において人を愛すること、人を赦すこと、忍耐すること、親切にすることを学んでゆくのです。他者、特に他のクリスチャンとの関係が無ければキリストにある品性を成長させることは出来ないのです。

三番目に一緒ならどんな良いことがあるのでしょうか？ それは一緒なら仕え合うことが出来ます。パウロはピリピの教会の人たちに「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」ピリピ 2章 2節と言って、互いに心を合わせて神に仕え

ること、そして人に仕えることを勧めています。一緒に神様に仕えることには良いことが多くあります。というよりも一人でどんなに頑張っても神様に仕えても出来ることは限られています。この礼拝がそうですね。多くの方々の奉仕によって成り立っています。昨日は昼食の準備、週報をはじめとする印刷物、玄関に貼る説教題字書き、そしてこの日、礼拝に関して受付、司会、奏楽等々みな神様に仕える思いで奉仕を捧げているのです。

私達に与えられている様々な賜物は自分のために与えられているわけではありません。他の人のために、そして神のために用いるように与えられています。しかも、コレクションのように賜物を持っていることが素晴らしいのではなく用いられてこそ意味があるのです。他の人にどんなにすごい賜物が与えられていたとしても羨むのは止めましょう。パウロは「また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。」コリント第一 13 章 2 節と言っています。さらに賜物は他の人と一緒になると、より用いられると聖書は言っています。「ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。」伝道者の書 4 章 9 節 私達が一緒に神様に仕えることは神様の御心なのです。4 番目に一緒ならどんな良いことがあるのでしょうか？ それは一緒だから礼拝ができるということです。共に礼拝を捧げるなら私達の信仰が強められ、喜びが増します。神様のご臨在、つまりここに確かに神様がおられるということを味わい、礼拝が福音宣教の場ともなります。イエス・キリストは「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」マタイ 18 章 20 節とおっしゃいました。二人でも三人でも神がおられるのであれば大勢集まればなおのこと神様のご臨在を覚えることができるのです。あるクリスチャン作家でもあり神学者でもある人が自分が初めて礼拝に出た時のことを回顧している記事を読みました。初めて礼拝に出た時は正直、讃美歌が好きになれなかったそうです。古臭い歌詞、変にかしこまって歌っているように思えて。しかし段々と歌っている間に歌詞の意味や賛美の素晴らしさが分かってきたということです。そしてふと向こう側の席にいる、多分仕事か何かで長靴を履いた老人が讃美歌を心を込めて歌っている姿が見えたそうです。そしてその姿を見た時に自分はそのお爺さんの長靴の汚れをふき取る資格さえない者であることに気づいたそうです。つまり自分が傲慢で鼻持ちならないプライドの高い者であることに気づいたということです。一緒に力いっぱい神様に礼拝を捧げましょう。

最後 5 番目に一緒ならどんな良いことがあるのでしょうか？ それは一緒だから伝道出来るということです。パウロは「あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており・・・」ピリピ 1 章 27 節と言って共に教会の人々が協力して福音を伝えている姿を高く評価しています。伝道というと聖書を知って、ちゃんと福音を語り、信じてもらわなければ意味がないように思う人がいますがそれだけではありません。伝道 (evangelism) ということば自体はキリスト教の歴史の中ではアメリカで 250 年ぐらい前に出てきました。福音宣教とは最終的にイエス・キリストが全ての人の救い主となってくださったことを知らせることです。つまり主イエスを紹介することです。主イエスはこのようなたとえ話をされました。「王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』

すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渇いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』マタイ 25 章 34～40 節 主イエスは御国を継ぎなさいとおっしゃいました。ここで神学的な論議をするつもりはありません。ただ聖書が示す、救いは私達がはっきりと信仰告白ができ、聖書にたいする理解が深まってからしか与えられないものではなくもっと広いことを教えています。もちろん、はっきりと理解し、言える人はそのようにするのが最も良いと思います。

大切なことは神様は私達が協力して福音宣教、伝道にあたることを願っておられるということです。

どうか皆で一緒に力を合わせながら教会を建て上げ、福音宣教に励んでまいりましょう。今後、一年間の中で5つのポイントをさらに詳しく見、語ってゆきたいと願っています。